宮崎大学教育文化学部紀要　人文科学　第７号（2002）１－７頁

文学としてのマンガ⑥
―― 渡瀬悠宇作『ふしぎ遊戯』の構成美について ――

山田　利博

Comics as Literature(Part Ⅵ) : The Plot of "Fushigi Yuugi" by Yuu Watase

Toshihiro　YAMADA

1　はじめに

「文学としてのマンガ」シリーズも、前回の「テレビゲーム「サクラ大戦」の文学性」を挟んで早８編目となった[1)]。それらは、基本的には中古文学研究者の目から見た、現在も残存する古代性という観点で論じてきたが、今回はやや趣向を変えて、作品の構成美という視点から述べてみたい。すなわち、古代性とは余り関わらないわけで、わざわざ発表するほどの価値があるのか若干の躊躇いがないではなかったが、作品の構成美もまた文学の一要素であることに疑いもなく、これが普通の小説であったら何の躊躇も感じないであろうし、それを理由とするようでは、マンガを文学並みに扱うというこれまでの態度と自ら矛盾すると思われたので、敢えて執筆することにした。

取り上げる作品は渡瀬悠宇作『ふしぎ遊戯』である。知る人ぞ知るこの作品は、1991年から96年まで『少女コミック』（月２回刊　小学館）に連載されたもの（コミックスにして18巻）で、この作者はこの後、『妖しのセレス』、『天晴じぱんぐ！』と、ほとんど途切れることなく連載を続けているから、今となっては聊か古いのは否めない。しかしこれを彼女の代表作の一つと数えることについては、恐らく誰も異論はないであろうし、95年４月から96年３月にかけて、その第１部がテレビ東京系でアニメ化された後、96年10月から97年２月にかけてオリジナル・ストーリーによるビデオが３巻、続いて原作第２部のOVAシリーズが、97年５月から98年10月にかけて６巻発売され、さらには再び外伝によるOVAシリーズが現在発売中という、彼女の他の作品と比較しても、極めて息が長いところにこの作品の特徴はある。もともとこの論考シリーズの出発点は、古典ほどではないにしろ、類似した多数の作品があるにもかかわらず、何故それのみが多くの人々に支持されるのかを解明したいというものであったから、そういう意味では、正しくこの作品もその要件を備えているとは言える。そこで今回はこれを取り上げることに決めたのだが、例によって、この作品を知らない人のために、先ずはその第１部の粗筋から紹介しよう。

2　第１部の構成

時間は遂に明示されないが、たぶん現代の東京[2]。中学３年生の夕城美朱（ゆうきみあか）は、母親の期待に応えるため、都内一の名門進学校・城南学院を目指して毎日受験勉強に励んでいた。尤もさほど頭が良いわけでもなく、食い意地だけは人並みはずれていた彼女は、後に示されるところによると、どうやら相当ストレスを溜め、現実逃避願望を渦巻かせていた[3]ようで、ある時、幼稚園からの親友だが、美朱と違い、頭脳優秀・容姿端麗の本郷唯と、ふと立ち寄った都立中央図書館の「一般者閲覧禁止図書」室で、『四神天地書』という、「昔の中国小説の和訳書」らしきものを見つける。

その第一頁には、「…是れは、「朱雀」の七星を手に入れた一人の少女が、あらゆる力を得て望みをかなへる物語で……」「…物語は其れ自体が一つの呪文（まじない）になっており、読み終ゑ（ママ）た者は主人公と同様の力を得、望みがかなふ。」と書かれていた（コミックス第一巻(92年６月）P.10）ので、何としても志望校に受かりたかった美朱は早速読み始める。けれど、これも後に明かされるが、この書物は実は魔道書の一種（コミックス第二巻（92年９月）P.139）で、訳者の奥田永之介の娘・多喜子を初めとして、永之介の親友で、『四神天地書』の正体に気づいた永之介から、その処分を託された大杉高雄の娘・鈴乃と、次々と少女を吸い込んでは、それぞれ玄武・白虎の巫女として物語を作り上げ、次の朱雀の巫女になるべき少女を待ちかまえていた[4]のであった（コミックス第十二巻（95年２月）PP.117～8)。

既に述べたように、もともとその時、無意識のうちに現実逃避願望を抱いていた美朱は、唯と一緒にたちまちその本の中に吸い込まれる。そこは古代中国のような世界で、「人売り」に襲われた美朱達は、後に運命の恋人となる、怒ると額に「鬼」のあざが浮き出る少年・琮鬼宿（そうきしゅく。朱雀七星士名たまほめ。17歳）に助けられるが、その時は逃避願望がさほど強くなかったのか、すぐに現実世界に戻れる。

しかしその後、結局は再婚することになるのだが、母が知らない男性とデートしているのを目撃した上に、夢か現実か分からぬまま日記に書き留めていた鬼宿のことを母に読まれ、受験生のくせに男とつき合っていると誤解され、なじられたのをきっかけとして再び『四神天地書』に向かった美朱は、やはり本の中に吸い込まれ、運良く鬼宿とも再会するが、同時に、幼い頃、異世界から来るという朱雀の巫女の話を聞かされ、すっかりそれにあこがれていた、女性よりも美しい皇帝・彩賁（さいひ。朱雀七星士名「星宿」＝ほとほり。18歳）とも出会う。美朱が異世界から来たことを知った星宿は、彼女こそが朱雀の巫女であるとし、二十八宿[5]を司り、鬼宿同様、体のどこかにその星座を表す文字を持つ英雄達のうち、南の朱雀に該当する七星士を集めて朱雀を呼び出し、朱雀が叶えてくれるという三つの願いを以てこの紅南国を救う運命にあることを告げる。美朱は、やはり志望校に合格したかったこともあり、朱雀の巫女になることを引き受ける。

そうこうしているうちに、開いたまま落ちていた『四神天地書』を閉じられてしまった美朱は、現実世界に戻れなくなり、それも朱雀に叶えてもらうべく早速七星士探しを始める。鬼宿、星宿以外で最初に見つかったのは、幼い頃、一つ下の、自分そっくりの妹を失ってしまったトラウマから、その代わりとして生きるため、自分を女性と思い込み、星宿の後宮に潜り込んでいた迢柳娟（ちょうりゅうえん。朱雀七星士名「柳宿」＝ぬりこ。18歳）であったが、彼（彼女？）が星宿を愛していたこともあり、美朱との間に奇妙な三角関係（初対面の時からお互い何となく意識し合っていた美朱と鬼宿を加えると四角関係）が生じる。そのため最初はしっく

りいかなかった美朱と柳宿の関係も、ウソと知りつつ柳宿との約束を守った美朱の行為によりうち解け、以後二人は親友（正確には柳宿の方には恋愛感情が交じっていたらしいことが柳宿の死の直前（コミックス八巻（94年２月）P.155）明かされる）となるが、その後、鬼宿にそっけなくされた美朱は、色々とストレスが貯まっていたこともあり、体調を崩す。美朱を愛している星宿は、美朱を一旦現実世界に帰すことを決め、その方法を聞くために、紅南国では、『四神天地書』を太祖（初代皇帝）に与えたことになっている太一君（たいいつくん）という、この世界を司る仙人のような存在（実は天帝なのだが、普段は醜い老婆の姿をしている）が住む太極山へと、皆で向かうこととなる。途中で美朱と七星士を試す太一君の試練を切り抜け、何とか太極山に辿り着いた美朱は、今度は現実世界に残っていた唯の力を借り、帰還を遂げることに成功するが、その代わりに唯を本の世界に引き込んでしまったことを知り、唯を救うためと、愛しい鬼宿にまた会うために、兄に全てを話して協力を頼み、三度本の中へと向かう。

その間に唯は、粗暴な男達に乱暴されかけ、青龍七星士の一人心宿（なかご。25歳）に危ういところを救われるのだが、異民族であるが故に虐げられ、この世を恨み、その征服を狙っていた心宿は真実を唯に伝えず、朱雀の巫女は救えたはずなのに救わなかった[6]と、美朱への不信を唯に吹き込む。最初は否定していた唯も、時が経つにつれ[7]、だんだん美朱が信じられなくなっていたところへ、本の中へと戻ってきた美朱が、鬼宿に会いたくて来たかのような発言をしたため[8]、遂に唯は美朱と敵対し、青龍の巫女となることを承知する。それでも美朱は唯を救うため、さらには紅南国を救い、現実には存在しない鬼宿と結ばれるという願いを叶えるために朱雀を呼び出すことを決意し、七星士集めを続けるのだが、青龍七星士の妨害により、朱雀七星士は最終的に、鬼宿・翼宿（たすき。17歳）・井宿（ちちり。24歳）の３人だけになってしまう。

けれど美朱は、七星士の代わりをする神座宝という宝を手に入れ、あくまで朱雀を呼び出そうと頑張るのだが、それすらも唯に奪われ、呼び出された青龍により、本の世界はおろか、現実世界まで心宿に支配されようとする。しかし最後は誤解を解いた唯が、美朱に朱雀を呼び出す力を与え、心宿と共に現実世界に来ていた鬼宿達朱雀七星士（半数は死んで魂だけの存在となっていたが）の力も借りて遂に心宿を倒し、本の世界と共にこの世界にも平和をもたらした。だが美朱と鬼宿を結ばせることは、朱雀の力を以てしても出来ないということであったが、二人の愛の深さが奇蹟を呼び、現実世界の人間として鬼宿を転生させることに成功するというのが、『ふしぎ遊戯』第１部の粗筋である。

既に少し紹介したように、そもそも美朱が『四神天地書』に吸い込まれた理由とか、全てが終わった時の『四神天地書』に対する美朱の科白「…お兄ちゃん」「…この本は…魔道書なんかでも危険な本でもなかった…よ」「今まで読んだどの本よりも…」「素晴らしい本だったよ…」（コミックス第十三巻P.177）、或いは、心宿が亡んだ時、全てが消えてしまったにもかかわらずただ一つ残った心宿がくれたピアスを、まだ唯がしていることに気づいた二人の、心宿を単なる悪人と位置づけない会話、（唯）「不思議だけど　これ消えなかったの…　…あたしさ今もどうしても　あの人憎めない…　彼は似てたんだ　あたしに…ううん…そう…あたしの中にいたんだね」「だからあの人を……自分の過ちを忘れないように一生持っとこうと思ってる――」、（美朱）「…うん…そうだ…ね」「あの人は…きっとあたしの中にもいたよ」「そしてほかのみんなも――」（コミックス第十三巻PP.185～6）、さらには第１部最後の、たぶん（主体が明示されていないので）美朱が新しい人生を踏み出す決意を語る心中思惟、「たくさんの哀（あい）

たくさんの愛　そして勇気と奇跡を教えてくれた物語を　私は決して忘れない　そしてまた今日から新しい物語が始まる」（コミックス第十三巻P.191）等々、この作品には心に残る言葉や話が多いが、そうは言っても基本的ストーリーは、さほど新しいものではない。

お気づきの方も多かろうが、現実世界には居場所の無い主人公が本の中に入り込んで英雄となるという設定は、ミヒャエル・エンデの『ネバーエンディング・ストーリー』、それも映画の方の影響が色濃いことは、年代（1作目が1984年、第2章が90年、3が94年上映）から言って明らかであるし、体に文字が浮き出る英雄というのは、正確には玉にであって少し違うが、おそらく『南総里見八犬伝』の影響であろう。すなわち、極論すればこの二つを混ぜればこの作品の大枠は出来、先ほど紹介した言葉等から読み取れる、主人公美朱の心の成長という、これも少女マンガには良く見られる要素（尤もこれも『ネバーエンディング・ストーリー』にも見られるもので、どちらからというのは、厳密には決めがたい）をそれに加味すれば、この物語の大体は成り立つことになる。

けれども勿論この作品にも独自な点はあり、中でも、作品が長編化したため、結局二十八宿がほとんど出てくる等は、『陰陽師』の映画が流行る昨今ではそれほどでもないが、当時としては珍しく、適当な参考書の無かった間は、稿者も良く教材として用いたものである。天人女房譚を扱った次の作品『妖しのセレス』もそうであったが、この作者は元来古典に興味があるらしく、『ふしぎ遊戯』という題名も、ブルース・リーの『死亡遊戯』等からヒントを得て、韻を踏んで決定したそうである（コミックス第三巻P.111）[9]。本稿最初で古典とは余り関わらないと書いておきながら、やはり稿者の趣味か、それと全く関係ない話は出来ない訳で、年齢・スタイル・性格等は異なるが、一様にいい男揃いである朱雀七星士、或いは敵の青龍七星士の何人かにすら、程度や質の差こそあれ美朱が好かれ、その中には一人ぐらい読者の好みに合う者もいるだろうという設定も、作者自らがコミックス第三巻P.111、135で語っているように、現代の女性向けテレビゲーム等にも通ずるが、男女反転させれば（と言うか、そのゲームの方が実は早く誕生している）この設定の淵源は、『伊勢物語』辺りに求められそうな気もする。尤も、ゲームはさておき、古典の作者が果たしてそこまで考えて書いているかは、まだ研究の余地があると思うので今回はやめておくが、この作品の魅力は、何と言っても第2部の存在にある。そこで次節はその粗筋から始めてみよう。

3　第2部の構成

当初は第1部と全く別な話にする予定であったらしい（コミックス第十四巻（95年8月）P.21）第2部は、結局続編という形でその幕を開ける。第1部終了から半年（本の中では2年後）、校外学習で高松塚古墳を訪れた美朱は朱雀星君と再会する。彼の言葉によるとこの高松塚古墳は、魔神・天罡（てんこう。北極星のこと）を四神の力で封印した所なのだが、盗掘により朱雀を描いた南壁が破壊されたため封印の力が弱まり、天罡は復活した。このままではこの世に災いが起こるので、再び封印してほしいと美朱は依頼される。

時を同じくして鬼宿が現実世界に転生した人間・宿南魏（すくなみたか）の前世の記憶（すなわち『四神天地書』内のそれ）の断片が、しばしば抜け落ちるという事件が出来する。その原因は転生する時に、心宿の背後にいた天罡によって、七つの玉の形をした「石」としてそれを奪われたためで、その玉を全て取り戻して心を完全にしないと、魏はやがて消滅することが発覚する。そこで美朱と魏は朱雀星君の力を借り、現実世界で1時間だけ『四神天地書』の中

に入り、その玉を探すことを繰り返す。

本の中では懐かしい顔ぶれの協力もあり、一度は全ての玉を集めるのに成功するのだが、圧倒的な天罡の力と、美朱が好きなのは今も鬼宿であって自分ではないのではないかと思う魏の心の揺れによって、全ての玉は失われる。さらに天罡は偽の鬼宿を送り、彼こそが真の鬼宿で、天罡の目をそらすための影武者が魏であったと信じさせようとした。玉を失って消滅するしかなく、自分は美朱を幸せに出来ないと思い込んだ魏は、一旦は身を引くのだが、ごまかしようのない美朱への愛と、偽鬼宿が迫った時の美朱の叫び、「今あたしが求めているのはあの人（魏のこと。稿者注）なの！！」（コミックス第十八巻（96年8月）P.49）とに導かれ、偽の自分と天罡を倒し、遂に二人は結ばれるというのが第2部の粗筋である。

第1部に比べれば第2部は、圧倒的に短いため、まとめてしまえば大したこと無さそうだが、美朱と魏が立ち向かっていく数々の試練にはやはり深いものがあり、一般的には正編より勝ることが少ない続編の中では、これは異彩を放っていると言えよう。しかしこの作品の真の魅力は、このように第1部、第2部と個別に見るのではなく、両者を相関させた時に現れる。

既にお気づきの方もいようがこの第2部は、一言で言ってしまえば魏の心の成長物語とまとめられる。傍点を付したように、心の欠けた部分を集めること、古来より「玉」は「魂」の象徴であること等からもそれは言えるが、何より偽鬼宿に対峙した時の彼の科白、「…オレはてめェに負ける訳にゃいかねェんだよ　自分（てめえ）にだけはな！！」（コミックス第十八巻P.124）から確実である。すなわち第2部は、偽鬼宿に象徴され、天罡にもつけこまれたような、自分の心の弱さ・迷いを魏が克服し、最後に愛する人と結ばれる話とまとめることが出来るわけだが、己の心さえ簡単に具象化できるマンガに於いては、これはさほど珍しくない。

現に第1部の太一君が与えた試練の中でも美朱の偽物は登場しており、彼女の言葉によれば、「あたしは美朱の影…美朱自身だもん！」で、美朱自身も、「（前略）あれはあたしだ　あたしの中のいいかげんな感情がこうして…」「この子の言うことやること　あたしが心の奥できっと　思ってることなんだ！」（コミックス第二巻P.61）と認めながらも、鬼宿と星宿の危機を救うため、影を消すには自身を消去すれば良いという聊か乱暴な方法により、死にかけながら打ち勝っているし、同じ巫女の力と七星士を有する唯もまた、象徴的には美朱の影である訳で、つまりは第1部も、美朱が己の心の揺れを制して心の成長を遂げていく話とまとめられ、それと第2部を重ねることにより、この作品の新たな側面が見えてくる。つまりそれは、恋人同士の一対の男女がそれぞれ成長し、結ばれる物語と全体を捉えることが可能ということである。

そしてそれを作者も意識していたであろうことは、もう一つ傍点を付したように、美朱が集めた朱雀星士の数と、魏が集めた玉の数が一致していることからも窺える。朱雀星士の数は、二十八宿を4等分して七と初めから決まっているが、第2部の玉の数は、如何に元朱雀星士が分け持っているという設定とは言え、鬼宿が抜けて今は六星士となっているのであるから、例えば六つでも構わないはずだからである。したがって、それが一致している以上、作者も意識してこの二つを対照させようとしていると推論せざるを得ないのであるが、これは非常に珍しいのではないかと思う。何故なら、実際には両方読んでいる作品も少なくないとは言え、マンガの種類が男性用と女性用（最近シニア向けも増えてきたので、敢えて少年・少女とは書かない）に二大別され、作者もどちらかの性を有する読者を想定して書くのが普通の日本マンガでは、先程も述べたように、どちらか片方の心の成長というのはさほど珍しくないが、両方描かれた上にこれほどきれいな対照構造を示すというのは、管見の及んだ限りでは余り類例を見な

いからである。それが、同じ作者の作品の中でも、これが特に愛される所以かと思い、今回特に取り上げた次第なのである。

4　結語

以上、渡瀬悠宇作『ふしぎ遊戯』第1部と第2部の対照的構成美について述べてきた。最後に、作者が当初考えた第2部ではなく、このような形となった偶然に、心から喜びを表したい。

注

1）　拙稿「文学としてのマンガ――現代版竹取物語・「セーラームーン」について――」(『宮崎大学教育学部紀要』　人文科学　第85号（1998年9月)、「文学としてのマンガ②――宮崎駿アニメについて――」(『宮崎大学教育学部紀要』　人文科学　第86号（1999年3月)、「文学としてのマンガ③――現代マンガにおける異界表現について――」(『宮崎大学教育文化学部紀要』　人文科学　第1号（1999年9月)、「文学としてのマンガ④――時と向き合った諸作品――」(『宮崎大学教育文化学部紀要』　人文科学　第2号（2000年3月)、「麻宮騎亜原作『コレクター・ユイ』について――古典文化の継承という側面から――」(日本アニメーション学会編『アニメーション研究』第2巻第1号A（2000年7月)、「文学としてのマンガ⑤――「引用」について――」(『宮崎大学教育文化学部紀要』　人文科学　第3号（2000年9月)、「テレビゲーム「サクラ大戦」の文学性」(『宮崎大学教育文化学部紀要』　人文科学　第3号（2002年3月)。但し、『コレクター・ユイ』と「サクラ大戦」は通し番号を付していないので、「文学としてのマンガ」シリーズは⑥となる。

2）　後に出て来る「都立中央図書館」が実在のそれとすれば、港区辺りとなるのだが。

3）　「…私は思ったのだ　お前達（夕城美朱と本郷唯のこと。稿者注）はこの世界から我々の住む世界へ逃げてきたのではないか？　己の安住の地を求めるのは誰しも同じ…（以下略)」(コミックス第十三巻（小学館　95年5月）P.109　心宿の科白)。或いは、同巻PP.63～64にかけて、現実世界に戻った美朱が鬼宿と一緒に自分の家にいるのを発見した母が、思わず、「何言ってるの！こんな時に恋愛にうつつを抜かして　そんなことで城南学院に落ちたらどうするの！！」と叫んだに対して、この時はすべての事情を知っていた美朱の兄・奎介（けいすけ）の科白「…そうやって…母さんはいつも美朱を追いつめてたじゃないか！」「こんなこと言っても　わかんないだろーけど　あんな本の中に逃げ込まなきゃいけないほど受験受験って」「現実（こっち）でいるより本の中にいるほうが生き生きしたなんて…バカみたいじゃないか！　もうやめてやれよ！自由にしてやれよ！」(「」はフキダシに対応する。以下同じ）も、結局同じことを意味していよう。

4）　この本は、基本的には一人ずつ少女を吸い込むらしいが、美朱の場合はたまたま唯が一緒にいたため、残る青龍の巫女として吸い込んだとのことである（コミックス第十二巻P.118)。

5）　西洋で言う十二宮のことで、星座の分け方が違うので数が異なる。古代中国等で用いた。なお星座名は、それぞれの七星士名の通り。

6）　唯が襲われていた時美朱は、現実世界と本の世界を結ぶ媒介（後に美朱が、二つ結んでいたリボンの片方を手渡して、兄との通信手段にした（コミックス第二巻P.166）ように、中と外で同じものが存在すれば、何でも良いという設定）である学校の制服をたまたま脱いでいたので分からなかったというのが真相。

7）　『四神天地書』の中と現実世界では時の流れが異なり、前者のほうが遙かに速く進むという設定。第1部の最後で明かされる（コミックス第十二巻）が、本の中では数か月に及ぶ美朱の冒険も、現実世界では僅かに1日ということになっているので、この期間は本の中では約3か

月に相当する（コミックス第二巻P.171）。

8）　コミックス第五巻（93年5月）P.108で自ら述べているように、美朱にとって鬼宿と唯は同程度に大切で、両方とも真実といったところだろう。そしてこれも後に明かされる（コミックス第十三巻P.111）が、唯が敵対した本当の理由は、幼稚園以来の親友であった美朱が、自分を置いて鬼宿のところに行ってしまうのが悔しかったからというのも、なかなか深い。

9）　字が小さくて読むのが大変だが、このコミックスには連載時広告等が入っていたと推定できるスペースに、作者自筆と思われる字で、制作裏話みたいなものが書かれていて非常に助かる。

（2002年4月30日受理）